野辺の落書き

小林まもる

藪の中で寒雀が賑わっていた野辺の送り
庭先を七宝焼きの枯葉がゆきかい
熟し柿はすでに落ちて跡形もなく
堆土の温みにいのちを繋いでいた

このように死ねるか　いま　おれは
とぼとぼと帰ってきた　只今
速くなった流れ　水底をえぐり
水神さまは傾きかげんに照り返し

着地点が見えない「一粒の麦」
額はつねに日輪にさわっているのに
二十一世紀初頭のふるさとには
未来からの置き土産はなかった

だからまだ実を結ぶことはできない
冬にも咲き続ける一日限りの
仏桑華（ハイビスカス）の花ように着飾って
やってくるその時を待つ